

〒223 番号未記載 トマ喰い虫社

湾岸戦争週報

もう一つの目

No. 5

91.3.15

責任編集：梅林宏道
発行：トマ喰い虫社

¥100

連絡先：電話 045-563-5101

FAX 045-563-9907

ニュージーランド

政権交替と戦争

昨年10月27日の総選挙でニュージーランドは、労働党政権から国民党政権に交替した。つまり湾岸危機で多国籍軍が作られていた途中に政権の交替があったのである。

政権交替は、ニュージーランドの湾岸戦争政策を大きく変えた。当然といえば当然のことであるが、改めてこの変化を記憶に留める必要がある。

選挙以前から、アメリカは労働党政権に対して、たとえ形だけでも多国籍軍に軍事的に貢献するよう強く求めていた。それは、国連のもとにおける団結を強調するのに、非核政策をとるニュージーランドでさえ多国籍軍に加わったというニュージーランド・カードを使えたからであろう。しかし、ニュージーランドの世論は湾岸危機への軍事的参加には強

く反対しており、労働党政権は軍事的中立を保った。親米色の強い保守政党である国民党も、選挙を前にしてこの世論の動向に強く左右されていた。

選挙の前日、国民党は「国連から求められた場合にだけ軍隊を派遣する」という政策をもって国民の支持を取り付けた。そして、選挙に勝利し政権の座についてからも、しばらくは労働党と同じ「軍隊を派遣せず」の政策を変えなかった。

しかし、12月に入って国民党政権の政策は急速に変化した。

12月17日、2機のC130輸送機が湾岸に派遣されることになった。輸送機はサウジアラビアの英国の輸送部隊に合流した。1991年1月の開戦直前には、軍医団が派遣され、バーレーンの米軍病院に配属された。1月下旬には、英國の要請によりさらに軍医の増派が決定されたのである。

国民党の政策変更は、明らかに、非核政策によって悪化していた対米関係を改善する狙いを持つものと考えられる。

湾岸から帰途につく 空母ミッドウェーら

「砂漠の嵐」作戦を終えた空母ミッドウェーなど横須賀を母港とする米海軍軍艦が、湾岸を離れ帰途についていることが明らかになつた。在日米海軍司令部が3月13日に明らかにしたものである。

空母ミッドウェーの随伴艦として5隻の横須賀を母港とする軍艦が「砂漠の嵐」作戦に参加していたが、それについての帰港情報は必ずしも明らかではない。

空母ミッドウェーはタイや香港に寄港したのち4月中旬に帰国するとされている。随伴艦の1隻である駆逐艦ファイフも、やはり4月中旬に帰国するという情報がある。巡洋艦パンカーヒルについては、ミッドウェーと

同時に帰るという情報と、別に一足早く4月上旬に入港するという情報とがある。出航時にはこの他に駆逐艦オルテンドーフとミサイル・フリゲート艦カーツが一緒であったが、この2隻が同時に帰港する可能性がある。もう1隻の巡洋艦モービルベイは、出航時は別行動をしてアラビア海で合流したと伝えられているが、帰港についてどうなっているか情報がない。

横須賀からは、上記ミッドウェー空母戦闘団を構成する6隻の軍艦のほかに第7艦隊の旗艦ブルーリッジが「砂漠の嵐」作戦に参加しているが、ブルーリッジの帰投についても今のところ情報がない。

空母ミッドウェー戦闘団の帰港はいくつかの重要な意味がある。

①湾岸戦争にこれらがどのような働きをしたかについての情報がもたらされる可能性がある。

すでにこの「週報」でも、第1、2号でミッドウェーのイラク海軍攻撃、モービルベイのトマホーク発射などの情報を伝えたが、全体としては情報がきわめて少ない。

②空母ミッドウェーは退役が間近い。より大型で強力な空母インデペンデンスが夏には交替で横須賀を母港にすると発表されている。その時期が明らかにされおらず、帰港後のミッドウェーの行動が注目される。

③モービルベイだけではなく、他のトマホーク搭載艦バンカーヒルやファイフもトマホークを戦争で発射した可能性が高い。これらのトマホーク発射管が空になって横須賀に帰ってくることになる。いつ、どのようにトマホークが補充されるか注目される。

現在のところ、西太平洋ではグアムにしかトマホーク供給能力を持った基地が無いとされてきたが、湾岸戦争の中で停泊中の海上で母艦からの補給が可能であるとの情報があった。横須賀を母港とする3隻のトマホーク艦の維持体制は、今後の横須賀基地の機能を考える上に重要な問題である。

湾岸戦の米軍

軍縮基調は変わらぬ アメリカ

湾岸戦の最中に、アメリカ人が何度も「素晴らしい小さな戦争（スプレンディッド・リトル・ウォー）」という言葉を引用しているのに接した。1898年のスペイン戦争を呼んだ当時のジョン・ヘイ国務長官の言葉である。

確かに米国は先勝ムードに酔い、軍事力による紛争解決に自信を深めていることは間違いない。しかし、このことが戦争前に抱えていたアメリカの国内事情、とりわけ、財政難を何一つ変えている訳ではない。湾岸戦争は、むしろブッシュ大統領に対して、これらの難題に対処する政治環境を緩和するのに、大きな役割を果たしていると言えるであろう。まだ地上戦への準備が続いている時期に当る2月4日、ワシントンでは1992会計年度（1991年10月から始まる）に対するブッシュ大統領の予算教書が議会に提出された。それを土台に国防予算の審議が始まった。この段階では、まだ戦争の長期化の懸念もあり、不確定要素を多く含んだ議論の出発であった。

しかし、戦争が終結した現在、この戦争の具体的結果を踏まえて、今後の米軍の戦力規模を含めた国防計画の議論が活発になろうとしている。

皮肉なことに、この戦争は、軍拡の必要性ではなく、ある意味では冷戦終結後の戦力規模の大幅縮小の可能性について立証した側面がある。

今回の米軍の戦力動員規模は、約50万人と地域紛争としては最大規模のものである。にもかかわらず、冷戦時代にアメリカが蓄積してきた戦力からするとまだ十分に余裕があった。ソ連との交戦を第一義的な非常事態と

考えていた冷戦時代の戦力規模は、ポスト冷戦時代には必要であると、今回の戦争によってはつきりと示されたと言えるのである。

たとえば、湾岸戦争に6隻の空母を派遣したが、7隻目の空母派遣提案に対してシュワルツコフ米中東派遣軍司令官は、その必要はない拒否をした。6隻でも1隻は補助的な運用をしていると伝えられる。だとすれば、現在、米議会に出されている1995年までに空母12隻体制に縮小する（現状13隻体制）という案は見直しを要求されることになるであろう。

グリンピースの軍事研究者で世界的な評価の高いビル・アーキン氏は、3月7日、湾岸戦争の結果が米国の空軍、陸軍、海軍、海兵隊の将来計画に及ぼす影響について考察している。在日米軍の将来を考えるのに一助となると思われる所以以下に要点を紹介する。

空軍

戦略爆撃への疑問

空爆作戦の成功で空軍の重要性については再確認されるであろう。ドナルド・ライス空軍長官は次のように述べた。

「急速に形成されようとしている新しい世界において空軍力への期待は大きい。それは、緊急展開が可能で、移動性があり、射程が長く、柔軟性に富み、致命的な破壊力を持っている。その結果、抑止力、必要に応じた反撃力、決定的パンチ力の使命を果たすことができる。」

ステルス戦闘機（レーダーに映らない）、他の戦術空軍力、戦闘機空輸、その他輸送機や空中給油など支援機、すべてが評価を受けるであろう。しかし、戦争前に空軍が最も強調していた長距離戦略爆撃については疑問が残された。B52の役割も確かにあったが、短距離のステルス戦闘機F-117Aや対戦車攻撃機A-10の方がより重要な働きを示

した。空軍内部では第2次世界大戦以来の戦略空軍中心の考えが根強い。それに対して、シュワルツコフ大将は別の見解を示した。

2月27日のブリーフィングで「イラクの前線部隊は75%壊滅されたにもかかわらず、大統領警護隊はあれほどの空爆でもどうして高い能力を残していたのか。」と質問されたとき、次のように答え、戦略爆撃の有用性に疑問を呈したのである。

「戦略的目標が最初の空爆目標であった。その時同時に我々は大統領警護隊の爆撃を開始した。したがって戦争の初期で我々は警護隊に激しい空爆を加えたのである。しかしピンポイント精密爆撃ではなく、戦略型爆撃機を使っていました。」

空軍は、おそらく、ステルス戦術空軍技術の成功を、戦略空軍と結合させることによって、現在購入しようとしている核、非核両用のステルス戦略重爆撃機B2を延命させるだろう。しかし、リビヤやイラクに1機6億ドルの戦略爆撃機が有効だとは到底考えられない。

陸軍

大陸軍不要論と 移動性陸軍の評価

全体的に見ると、空軍とともに陸軍は、今回の戦争で点数を稼いだ。伝統的には、陸軍には地域紛争や軍事介入に使われる軽装備師団と、ヨーロッパ中部でのワルシャワ条約機構との戦いに備えた重戦車機甲師団がある。

今回、軽装備師団を空輸によって緊急展開できることと海上輸送によって許し得る時間内に重機甲師団を展開できることを示し得たことは陸軍に有望な評価を与えた。

また、今回、戦争の「前線」概念を根本的に変えるエア・ランド・バトルが極めて有効であることを示した。前線と言うものは金科玉条に守る静的な線と考えるのではなくて、

機動性を活かし敵領土内部で兵力をたたくことによって結果として守り前進させて行くものだ、という考え方である。

このような評価にもかかわらず、ヨーロッパ戦線のなくなった冷戦後における陸軍の役割の低下は隠すことは出来ない。今年2月の「ミリタリー・レビュー」に、ブラウン中将（退役）すらも「陸軍は、海軍あるいは今日では多分空軍の第2バイオリンに逆戻りしようとしている」と認めていた。そして陸軍を延命させる方法は「陸軍予備役を維持することだ」と提案している。その場合でも、戦死者の増加を強く嫌うアメリカの世論の中で「大きな陸軍は、地域紛争の中で主たる戦闘部隊にしてはほとんど要求されないであろう」と認めているのである。

海軍・海兵隊

原潜・海兵隊 打撃を受ける

海洋発射巡航ミサイルの成功にもかかわらず、海軍は今回の戦争における大いなる敗北者である。海軍はいち早く現地に兵力を展開し、経済封鎖に重要な役割を果たした。空母、戦艦の派遣は多くの注目を集めた。しかし、クウェートからイラクを追い出す仕事をするのに海軍の名前があがつたことはなく、いつも陸軍か空軍であった。

要は、冷戦後の軍事紛争において海軍の役割を強調しすぎてきた嫌いがある。

空母についての議論をすでに紹介したが（3ページ）、空母の規模を、多分10隻体制でも多すぎるという議論が強くなると考えられる。空母艦載機の出撃が全体の20-25%を占めたことは事実である。しかし、1空母戦闘団当たりの装備費が150億ドルであることを考えると、空中給油可能な戦術空軍や、移動性の高い空軍と陸軍の結合の有用性が見なされることになるであろう。

原子力推進の潜水艦が冷戦後に必要かどうか、この戦争でますます疑問視されるであろう。トマホークを原潜から発射してみせたが、

原潜からである必要はない。

海兵隊も今回の戦争においては出番が無かった。海兵隊は2種類の任務にいつも引き裂かれている。一つは揚陸部隊としてのユニークな任務と緊急展開可能な地上兵力として陸軍と競合する任務である。2海兵師団が今回の地上戦に参加したが、それだけでは得点にならないだろう。揚陸作戦は結局行なわれなかつた。

湾岸派遣沖縄米兵も 戻り始める

3月10日頃から沖縄に湾岸派遣部隊が嘉手納空港に帰還し始めた。13日までに少なくとも約70人が帰還している模様である。帰還が明らかになったのは、嘉手納に配属されている第376戦略航空団のKC135空中給油機の部隊である第909給油中隊である。全員無事であると伝えられている。ある大尉は、「スターズ・アンド・ストライプス」紙のインタビューに、「砂漠の盾」作戦で25回、「砂漠の嵐」作戦で26回、KC135で飛んだ、と答えている。

●この週報は月刊「トマ喰い虫」号外として出していますが、次週はちょうど本体の発行と重なりますので休みます。予約頂いている方々には本体を送らせて頂きます。●次号は3月29日です。その号を増ページのまとめ号にして、ひとまず「週報」を休刊にし、もし大きな情勢の変化が無ければ自然に終刊とします。

●本号ではPCDS（太平洋軍備撤廃運動）、グリーンピース、宜野湾市職労の協力を得ました。●FAXサービス（料金は地域により異なります）、郵送（1号につき200円）をいたします。お申し込み下さい。